



Title	<書評>森田團『ベンヤミン－媒質の哲学』 水声社, 2011年
Author(s)	柿木, 伸之
Citation	形象. 2016, 1, p. 116-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75787
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

森田團 『ベンヤミン——媒質の哲学』

「水声社、一〇一一年」書評

柿木 伸之

一九四〇年九月二六日の深夜、ヴァルター・ベンヤミンは、

ちがない。

アメリカ合衆国への亡命の途上で行く手を阻まれ、フランスとスペインの国境の街ポルトボウで自殺を遂げた。このとき彼は、わが身をナチスのゲシュタポの手に引き渡すことを最終的に拒否したのだ。そこに至るベンヤミンの生涯は、他殺の拒否によつて貫かれており、それが不斷の亡命となつて表われていると見ることもできよう。彼は、一九三三年にナチスが政権を掌握したドイツからパリへ亡命する以前から、ギムナジウムの権威主義的教育からの亡命、第一次世界大戦中の微兵忌避などのかたちで、自分を、いや自分の魂を殺す暴力から逃れ行くための隘路を求めて続けた。その歩みは、彼の言う「死後の生」を含めた生が、それぞれの特異性において肯定され、究極的には救済される場を追い求める思考の歩みと一体になつてゐる。最期まで言葉の書き手として生きた彼は、その場を言語そのもののうちに切り開こうとしていたに

このようならベンヤミンの思考の歩みは、「媒質 (Medium)」の原理の探究であり、それを貫くのは神話的なものとの対決である。本書『ベンヤミン——媒質の哲学』は、こうした視座から、一九一四年から一九三四年までの二十年にわたる彼の思考を綿密に辿り、その特徴を同時代の思想史的な布置のなかに浮かび上がらせた労作である。著者によれば、ベンヤミンの思考の核心には媒質の哲学がある。媒質、それは自然と人間のような関係し合う二項それ自体を産出しつつ、両者の関係を可能にする母胎として、言語学で言われる中動態——ドイツ語の再帰動詞などに痕跡を残すこの動詞の古い様相は、おのずと生じる出来事を表わすのに適しているという——において生成する媒介者である。この媒質の生成が表現の産出とつねに一つとなるところで、生そのものが形づくられているのだ。この根源的な出来事を、ベンヤミンは一方

では言語として、他方で「イメージ〔像、形象：Bild〕」として考察している。そして、両者が交差する地点で、彼は神話的なものと対決することになる。しかもそれは、彼が影響を受けた同時代の思想との対決に結びつかざるをえない。著者は、このことに光を当てることによって、ベンヤミンの独自の思考の起源を浮き彫りにしていく。

著者によれば、神話の根源にはイメージがある。自然の生がイメージとして生き生きと立ち現わてくるままに「共体験」されているところで、神話の魔力が活性化するのである。このとき、イメージを「共体験」する者の生が、それ自体イメージとして形づくられ、否応なく運命の支配下に置かれることがある。こうして生ある者を浸していく力——これをベンヤミンは「神話的暴力」とも呼ぶ——は、ゲーテの小説『親和力』の批評などで取り上げられる湖沼が象徴するように、著者が「ハデス的なもの」と呼ぶ死の淵から生じている。水底から発している神話の力は、生ある者に浸透し、それを潤すうちに生かすようでいて、やがて犠牲の堆積のうちに引き込んでいく。『親和力』におけるオッティーリエの死は、この力による没落の象徴なのだ。たしかに、こうして神話の力に曝されることは、生ある者にとって不可避であろう。しか

し、その過程を美化することは、歴史上の人工的な神話も含めた神話の支配をみずから強化して、生そのものを否定することでしかない。

ベンヤミンによれば、同時代のルートヴィヒ・クラーゲスの生の哲学は、イメージの「共体験」を軸に展開されることによって、結局は犠牲の美化と神話の支配の強化に陥ってしまっている。ベンヤミンは、生そのものを、イメージにおいて自己を表現するものと捉え、そこから筆跡学を展開したクラーゲスの思想から多大な影響を受けつつも、そこにある生の神話化と対決することをつうじて、独自の思想を形成した。このように、同時代の生の哲学との緊張関係のなかからベンヤミンの思想が紡ぎ出されていく過程を綿密に辿ることによって、彼をめぐる思想史的な布置を規定し直しているところが、本書の特色の一つをなしている。彼の思考は、生の神話化によって特徴づけられる生の哲学とは別の仕方で、また『救済の星』のフランツ・ローゼンツヴァイクとも呼応するかたちで、生を真に肯定する可能性を探り始める。そして、ベンヤミンにとって、それぞれの生が肯定され、救済される場として経験されるのは、言語という媒介にほかならない。著者によれば、イメージの現出を特徴づけるのが「共体験

(Miterlebnis)」であるのに対し、言語の経験を特徴づけるのは、「伝達 (Mittelung)」である。ただし、ここで「伝達」とは、すでにある情報を、記号の意味として伝えることではない。ベンヤミンの考える「伝達」とはむしろ、それぞれの生が名づけられ、分かち合われる出来事であり、それによって自他の差異がそのつど新たに分節されるとともに、生がその特性において救い出されるのだ。その可能性へ向けて、一般に「コミュニケーション」と称される過程が、さらにはベンヤミンが「複製技術時代の芸術作品」において提起する「コミュニズム」が——おそらくは分有の思考として——捉え直されるべきであろうが、ともあれ彼によれば、この命名する言葉の出来事を貫くのは、それぞれの言語を第一次的に生成させる翻訳である。

たしかに、初期の言語論「言語一般および人間の言語について」に描かれる楽園において翻訳は、ボーディレールの言葉を借りて「万物照応」とも呼びうる関係において生き生きと創造的に行なわれていたのかもしれない。しかし、墮罪の後の地上の世界において、生きた言語は失われたものであるほかはない。そこにはむしろ、神話の魔力が脈打っているのだ。そして著者によれば、そのようななかで神話の支配を乗り越え、生ある者の救済の場をなす言語に再び息を吹き込むためには、存在を文字に反転させるような翻訳が必要になる。ベンヤミンはこの反転の可能性を、『ドイツ悲劇の根源』においては、バロック悲劇を構成するアレゴリーが、記号的な意味を剥落させてヒエログリフと化す弁証法的運動のうちに、またカフカ論においては、身ぶりに満ちた世界のなかで、被造物が歪みを露呈させ、「脱形態化」するところに見て取ろうとしているのだ。神話的世界の廃墟にこそ、生を——「死後の生」を含めて——肯定する余地が開かれるのである。

著者がカフカ論のなかで注目する、正義の門へ通じる法の「研究」は、神話的世界の廃墟のただなかで文字を解読し、地上の生ある者たちに言葉における救済の道を探る、「脱形態化」の身ぶりと言えよう。それはさらに、文字として解読されたイメージによって新たに描き出され、そこに被造物の「死後の生」が救い出されるような歴史の可能性を切り開くものでもあるにちがいない。本書は、ヨハン・ヤーコブ・バッハオーフエンの『母権論』との関係を踏まえたベンヤミンのカフカ論の読解などを経て、最終的に、ベンヤミンの歴史哲学のうちに、彼の神話的なものとの最後の対決を見届けようとしている。著者によれば、『パサージュ論』のための覚え

書きのなかで「夢のイメージ」や「ファンタスマゴリー」と称される神話的なイメージを文字として解読することをつうじて、ベンヤミンは、イメージがイメージであるままに、被造物の救済の場をなす言語——一つの「文字イメージ」——として立ち現われる道筋を切り開こうとしていたのだ。

このように、ベンヤミンの思考の軸をその文脈から浮き彫りにしながら、彼の歴史哲学の方向性を指し示すに至る本書は、彼の「媒質の哲学」から、神話としての歴史の暴力を解体する、新たな歴史の可能性を切り開くことへ読者を誘つていよう。犠牲を強いる神話の魔力を乗り越えて、被造物の生がその特異性において救済される場、それはベンヤミンにとって言語であるが、その言語は、地上の世界においては、歴史のうちにしか見いだされない。しかも、その歴史は今や、「神話的暴力」が出来事を否認し、記憶を抹殺しながら犠牲を強要し、生命をその根底から破壊しつつあるなかで、それに抗して追求されなければならないのだ。他殺を拒み、歴史において生を肯定する可能性へ向けて、神話的なものと対決するという課題を提示しながら、ベンヤミンの「哲学」のさらなる「研究」へ読者を導く本書が、広く読まれることを願つてやまない。